

## 桜 守 一 途

—水上勉の新聞小説—

*Sakura Mori* (Cherry tree Man)—A Note on *Tsutomu Minakami*—

辻 憲 男

TSUJI Norio

要旨：水上勉の新聞小説『櫻守』（一九六八年）の読書ノート。作中の主要な挿話五つを選び、それぞれに評釈を付して文芸的意味を考察した。さらに関連して、各挿話における虚構と事実の相異や、人物とモデルの関係について、またこの作品にこめられた作者の思想の一端について私見を述べた。

キーワード：『櫻守』、水上勉、笹部新太郎、荘川桜

水上勉の小説『櫻守』は昭和四十三年（一九六八）九月から十二月まで「毎日新聞」夕刊に連載され、翌年五月に新潮社から出版された。五十二年刊の『水上勉全集』第11巻の頁数にして百六十六頁、およそ三百二十枚の中編小説である。結構をひと口に言えば、主人公・北弥吉の桜一途の生涯を、さまざまの挿話でつづった一代記といった体裁をとる。幼年時の桜の記憶に始まり、植木と桜栽培についての修業時代、結婚、応召、そして戦後植木職人「桜守」として一生を終えるまで、四十八年の年代記である（大正五年〔一九一六〕～昭和三十九年〔一九六四〕）。本稿はその中の桜にまつわる五つの主要な挿話に注目し、それぞれについて私なりの読解と評釈を試み、私見を付したものである。小説は単行書や全集本では章立てがないが、初出の新聞紙面の小カットによれば、大きく、

- (一) 幼年時から結婚まで
- (二) 終戦まで
- (三) 昭和三十六年まで
- (四) 同年の老桜移植の話から、死まで

の四章に区切られたごとくである（全集第11巻の頁で示せば、仮に第一章5頁～、第二章32頁～、第三章89頁～、第四章105頁～となる）。以下これに沿い、(1)祖父と母のこと、(2)竹部庸太郎との出会いのこと、(3)園との結婚のこと、(4)御母衣ダムの建設で水没する老桜の移植事業のこと、(5)湖北海津の巨木の下に眠ること、の五節に分けて要点を記すことにしたい。

## (1) 祖父と母のこと

冒頭早々に語られる祖父と母のことは、一種の“原罪”的な体験として主人公に植えつけられた。弥吉が九歳の春、朝から母が祖父の山仕事について来た。弥吉が二人から目を離した短い間の出来事だった。翌年祖父は死に、その次の年に母は父と離縁して、その後岐阜へ再婚して行った。それきり会わない。後年父の葬式があった時に、母は郷里で息災であると聞いたが、弥吉はその翌年にガンで逝った。

弥吉は肉親との縁が薄い。まるで父母に見捨てられたような少年時代だった。最も血縁につながるのは祖父である。桜を知ったのも五歳か六歳の頃、木樵の祖父について背山へ登った時だった。「弥アよ、山桜が満開や」。宮大工の父は家をあけていた。早くに気持ちは離れていた。母は田仕事をし、家での独り居が多かった。その時は「不意に足もとから、母と祖父の笑う声がした。満開の桜の下だった」。蜂が花の蜜を吸っているのを弥吉は眺めた。やがて来た継母になじめず、十四歳で京の植木屋に奉公に出た。

それにしても孤独で淋しい生い立ちである。桜一筋に生きたのも、両親から温かい愛情をほとんど受けなかったことと関わるかもしれない。可愛がってくれた祖父だけが、わずかに桜の思い出を遺した。後年、弥吉はしばしば祖父を思い、父母を思った。母も不幸な人である。戦時中に岐阜の連れあいをなくし、再び実家に戻ったと聞いた。「実母を憎んでいるか、といえば、そうではない」。二十七、八だっ

た若い母の姿はむしろ「憧れの中で生々している」。母性思慕と美しい花の景とが重なる。岐阜は桜の山国でもある。人間の生の営みと木の命・花の命が交響する。若木も老木も年々に花をつけるが、花の命は短くはかない。人間の生も花のように短い、しかし老木のように永く花を咲かせることはできない。花を愛惜する心は、己が生をもいとおしむ。

祖父と母の交歓は弥吉の“原初の情景”である。それが父と母でなかったのは弥吉の不幸である。満開の桜が悲しく隠微なものとして在る。明るい陽画が反転した暗い陰画となる。しかしその二つは別のものではない。命の盛りの桜にすでに性愛的なものがあり、やがての死をはらんだ美しさがあるからである。ここに梶井基次郎や坂口安吾、あるいは大岡昇平らの先蹤<sup>1)</sup>を引くまでもなく、満開の桜の下はかつて生きた者の死屍累々の墓場である。明治四十三年の谷崎潤一郎の「刺青」に出る絵もまた、「画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と算を乱して斃れたる幾十の男の屍骸を見つめて居る」という構図であった。古来、桜に死の匂いを嗅ぐのは命というものはかなさを知る故であったろうか。『櫻守』の莊川村の老桜も、湖北海津のそれも寺や墓地の巨桜であった。<sup>2)</sup>

ところで、昔話の花咲翁のモチーフの要は、殺された犬が木になり臼になり灰になっても翁に幸福をもたらすというものである。古い雁取翁型でも、枯れ木に花を咲かせる翁型でも、木の灰に動植物の精霊が宿る。死後の灰が花になって再生する。老翁は神霊の現し身であり、木の花を咲かせるアニマは美しい女神の姿である。弥吉の幼少時の原体験には、そのような昔話や神話に通じる土俗的信仰が重なる。祖父は去り、母は二度と姿を現さない。祖父と母のことは弥吉ひとりの“民話”幻想でもある。さらにつけ加えれば、桃太郎の昔話の典型の一つに、発端が「父と母とが花見に行って弁当を食べようとやすんでいると、母の腰の所へ桃の実が転がってきた。母は拾ってふところに入れ、家に帰り」云々と始まるものがある（岩手県紫波郡。『日本昔話名彙』による）。腰の桃は性愛を意味する。

花見は受精の時機だというのが、農山村の民の自然の思惟である。弥吉の幼時体験はそういう民族共有の原体験に連なるのである。さてそのような時機は、弥吉の身の上にはそれから二十年目にめぐって来る。

## (2) 竹部庸太郎との出会いのこと

昭和十八年六月、弥吉は喜七に連れられて竹部の家を訪ねた。五十七歳の竹部は、喜七のうしろでうつむいている弥吉をじろりと見た。京の「小野甚」で十三年間修業したとは言え、「背丈は五尺そこそこのチビで、顔は小造りで鼻が低く、陰気な感じ」の、生椎茸みたいな大耳の「どうみても丹波の大工の子であった」。竹部はそんな弥吉を気に入った。弥吉も竹部を温かく気さくな人だと感じた。桜の縁があった。

竹部は三年前に妻をなくしていた。「もうこの世に、かわいがるもんは桜以外に無うなった」「後添えももらわずに、桜の花に<sup>はう</sup>呆けてはる気持も、わからんでもない」と喜七は評した。竹部もまた孤独な人であった。「恰幅のいい、五尺七寸もあろう」「肩の張った体軀」「心もちへの字にひきしぼった口もと」「柔和な眼ではあるが、形のいい眉毛が、太く両脛の上にかぶさっている」。まるで大きな桜の名木を見るような風姿である。いかにも「桜にとり憑かれた人」「桜男」らしい。弥吉は向日町と武田尾の小舎に住み、この先生に「惚れて」、桜栽培のコツを教えられた。竹部の「桜気ちがい」は若い時分からである。「先生も桜気ちがいなら、あんたも気ちがいに近い」い、と後に園は弥吉を揶揄した。

竹部庸太郎の実在のモデル・笹部新太郎は、明治二十年（一八八七）大阪の大地主の家に生まれた。東大の学生時代から桜の研究を始め、同四十五年に武田尾に演習林を造園した。向日町の桜苗圃は昭和十年（一九三五）に出来た。結婚は大正九年（一九二〇）、梅子夫人は旧庄内藩主酒井忠崇の長女であった。夫人が亡くなったのは昭和三十三年、笹部が神戸岡本に転居したのは三十五年のことである。<sup>3)</sup> 水上は小林秀雄の勧めで笹部の著書『桜男行状』を読んだ。

小説の年代設定はモデルの年譜とずれている。夫人を早くに失ったことにしたのは、竹部の桜一途の孤独な生活を印象づけるためであろう。山行きを好まなかった亡妻が一度だけ武田尾の小舎に泊まったことがあった、という「とっときの話」を竹部は弥吉と園の前で披露した。弥吉と喜七が初めて訪ねた時、竹部はすでに岡本で一人暮らしをしていた。何かと不便だろうが、反面家庭生活に煩わされることもない。また昭和三十六年に弥吉が再訪した時も、お手伝いの女性がいるきりだった。桜にとり憑かれた孤独な生涯を浮かび上がらせるための設定であろう。

### (3) 園との結婚のこと

同じ十八年の夏末に弥吉は園と初めて出会った。園は「気の毒な娘さん」だった。嫁した夫がひと月半で戦死し、二十四歳で未亡人だった。弥吉も園も互いに好意を持った。丙種合格の男は恰好の相手でもあった。縁談が進み、「挙式は武田尾の山桜が満開に近い四月十日にきまった」。披露宴の席で弥吉は、その夜は桜山の番小舎に泊まりたいと言った。二十年生ぐらいの「楊貴妃」が小舎の屋根に届くほどに枝を垂れていた。弥吉の話題はどういうわけか、桜のことしか出てこない。「あんたと会えたのも、桜の縁やし、ここに桜山がなかったら、わしらは、一生……会えなんだかもしれんな」。

弥吉は周りの人々の温かい気持ちに触れた。「女も桜の移植に似たようなところがありませ」と竹部は言った。これは作中人物の口を借りて作者の自然観・生命観が表われたのである。例えて言えば、弥吉が<sup>だいぎ</sup>砧木で、園が接木だから、その合目をしっかり接いでしっかり咲く木にしてほしい、夫婦とはそういうものだ、というのであろう。また宴席では喜七が「若夫婦が接いだ桜は、よう育つといたしますが」と問うと、竹部は「木イにそんだけ愛情が出るから」だろうと答えた。これも、人間も草木も同じ生命を生きているという人間観から出た言葉であろう。弥吉と園も桜のように接がれる。作者は表現を飾るわけではないが、花嫁は花びらのように優美である。

弥吉が腕をはなして、畳へ眼をやると、乱れ髪がながれて、楊貴妃の花弁が一つ、小貝をつけたようについていた。弥吉はうっとりとしてそれを眺めた。

人間と花がおのずからに合一している。親の愛の薄い弥吉と、結婚運に恵まれなかった園が接木のように一緒になる。各々の不幸せは桜の縁によって救われるであろう。園は子供の頃によく竹部山に入って桃を盗ったという。弥吉はその山の番人になった。桜山の縁に結ばれた夫婦である。園という名づけも桜守にふさわしい。二人を取り持った竹部、橘喜七、佐々木らも木にちなむ姓が選ばれた。

終戦直後に生まれた榎男は、後に高校を出て植木職人になる。父親のあとを継いで木の命を守るのである。親の愛薄かった弥吉は、一人息子に温かい血のつながりを見いだすのである。

### (4) 御母衣ダムの建設で水没する老桜の移植事業のこと

昭和三十六年四月、名神高速道路の建設によって向日町の苗圃が取り壊される。その新聞記事を読んだ弥吉は、矢も盾もたまらず竹部に会いに行った。しかしそこで聞かされたのは、岐阜県荘川村の御母衣ダム建設で水没する樹齢四百年の老桜を移植するという難事業を、竹部が引き受けたという話だった。「先生どない返事しやりました」／「そらしかたおへんやろ。やってみまひょ、いいましたよ」。

弥吉は、竹部の家を辞去して、岡本の駅へ急いだが、世にも不思議な、桜にとりつかれた人を見たと思った。竹部は今日七十五歳である。桜一途に生きてきて、すべての財産を投じて、桜の品種改良と、日本古来の山桜の保存育生に身をけずる思いできた。その今までの努力はわかるけれども、老境に入って、前代未聞の老桜の移植をひきうけている。誰がきいても無茶ではないか。もし、不成功に終わったら、竹部は今日までの桜にそそいだ人生を棒に振りはしないか。汚点をのこして終ることになりはしないか。弥吉はそう思った。

九分九厘まで絶望的な「暴挙」と思われた。電源開発の芹崎哲之助は老桜の写真一枚を持って、一人で竹部を訪ねた。芹崎の桜への熱い「愛情」に竹部は感動したのだった。

荘川桜の移植の挿話は、この小説の最大の事件である。前述の第四章部分（三十六年以後）の初め、小説全体の約三分の二のところでのこの話が出て来る（全集本112頁以下）。山場である。作者自身が「この小説を書きたいと思いたった動機も、この大桜を仰いだ時の感動からであった」と書いた（単行本あとがき）。ただしこの「史上空前の大移植」事業は、「直接手をよごして働く人」によって完遂した。そういう桜好きの職人を小説の主人公にした。実は連載中に、笹部から「弥吉への作者の傾斜が気にくわぬ」ふうの手紙が届いた。<sup>4)</sup> 作者は困ったが、しかしこのことは譲れなかった（全集あとがき）。もとより作者の主題は学者や事業家の功績顕彰ではない。彼らの伝記を書くことではない。

竹部と芹崎の会談は実話取材に基づく（もっとも小説の年代設定は一年うしろにずれている）。実話は、笹部の詳細な回顧録「御母衣の桜」（『桜男行状』新訂増補版所収）によれば、三十五年早春、大阪俱樂部で笹部が電源開発前総裁・高碓達之助と面会し

た。まず写真を見せて「活着の見込みはありますか」と聞かれ、「私だとてそんな事に自信は持てませんナ」と答えた。次いで「——絶対に駄目ですか」と詰め寄られたので、そこで高碕の真意を「やればいいのでしょう。活着など、いわばどうでもいい」なのでしょう等々と弁じ立てた。すると高碕は「万事あなたにお任せしますから早々に移植にかかって下さい」と言った。“ものの勢い”で「私でよろしくばやってみましょう」と答えた。家に帰って、しみじみと“勇み足”を恥じ“不覚”を悔いた。「ままよ、どうとでもなれ！ やれるだけはやってやろう」と、「不運にもこれに失敗したら、私は今後もう桜を語るまい」との、相反する二つの思いがあったという。

笹部の記すところによれば、高碕との会見はあたかも心理劇のような“綱引き”であったごとくである。対して小説家は生き物を愛する心を根本に、芹崎の人間的な心熱と、竹部の桜一筋の執念が意気を感じて決断した大いさを中心に据えた。<sup>5)</sup> しかもそれらを弥吉と喜七の理解を通して語らせた。「職人の意気地」という喜七の言葉が弥吉にも思い当たった。作者は竹部の覚悟のうちに強い職人氣質を重ね見たのである。竹部は芹崎に〈世の中に、物事で絶対それがあかんということはおへん〉云々と答えた。上の実話では、笹部は高碕に「絶対などという言葉は、こと生き物に関する限りいやしくも私は使いたくありません」等々と弁じた。桜の生命力に肩入れする“桜男”の意地を突つかれたごとくである。

笹部のそのような雄弁を、小説家は竹部の気負わぬ物言いにやさしく和らげた。弥吉の眼にはただ「世にも不思議な、桜にとりつかれた人」が映った。弥吉の談話から、桜に生涯を賭けた男の人間像が浮かび上がる。

弥吉は老桜を見守り、移植の成功を祈った。手伝いができなかったのは仕方がない。竹部にしてみれば、向日町の苗圃は非運とあきらめるにしても、思いがけず降りかかった移植の話は何とかなして成功させたかったに違いない。そういう静かな不屈の精神、老生の起死回生の賭けを小説家は造型した。実話は、苗圃の取り壊しと莊川桜の活着とは同じ三十六年の春のことであった。

##### (5) 湖北海津の巨木の下に眠ること

三十八年の五月に弥吉の父が死んだ。父を埋葬する時、自分の墓のことを思った。故郷の鶴ヶ岡だけはいやだ、「同じ埋まるなら、どこか、生きのいい桜

の木の下か、それとも、いっぱい咲いた桜林で死にたい」。その秋に近江舞子から湖北海津へ回った。清水の大桜は毎年見に来て、つるを切りひこばえをきれいに掃除していた。<sup>6)</sup> 弥吉はその翌年の十月に逝った。清水は村の共同墓地だから、他所の者が葬られることはむずかしい。弥吉の遺言はしかし、竹部の力添えによって実現された。小説の最後の挿話である。

作者は実在の墓地の巨桜を選んだ。観光名所ではない。墓とともに永くひっそり生きてきた。雪深い湖北の、孤独で淋しいヒガンザクラである。「墓場やさかい、人の魂が守ってんのやな」。それを大事に守りしてきた職人を、今度は桜が守りするのである。桜の寿命はだいたい五十年だという。それに合わせるかのような四十八歳の人生はあまりに短い。しかしそのように設定することで、弥吉の命はむしろ永遠に生かされるのであろう。「人間は桜とちごうて、腹がないことには生きられん」と弥吉は言った。

実話は、この木は元は一寺の所有だったが、村人がみな「こんな立派な桜の下に眠りたいと願った」のだという。根元の近くは多く戦死した兵士たちの墓石である。事実「庶民の霊が守った桜」であった。<sup>7)</sup> 水上は『櫻守』執筆より以前、『沙羅の門』『しがらき物語』『湖笛』『湖北の女』『湖の琴』など、近江を舞台にした作品を次々に発表した（三十九年～四十一年）。湖北の取材は三十八年以前のことと思われる。ただし海津の宝幢院に武田元明の墓を訪ねた時の文章には、大桜のことは書かれていない。<sup>8)</sup> それの実見は三十九年以後の取材旅行の間であったろうか。その実年代が小説の最終章の設定年とほぼ一致しているのは偶然ではあるまい。

ちなみに笹部は二十七年に偶然この桜を“発見”した。そのめぐり合わせの僥倖は、まさに観音様の「御利生」と思われたという（前掲著書）。

桜の歌と言え、西行法師の「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」が思い浮かぶ。山川登美子の「後世は猶今生だにも願はざるわがふところにさくら来てちる」の哀切にも心うたれる。歌人の観照はそれぞれに个性的であるが、そのように桜に滅びの美を見、ふと己の運命を自覚するのは、思えばこの国の長い文学伝統なのであった。

##### 注

- 1) 梶井基次郎「桜の樹の下には」昭和三年。坂口安吾「桜の森の満開の下」同二十二年。大岡昇平『花影』同三十六年。
- 2) 柳田国男「しだれ桜の問題」は、殊に枝垂れ桜が寺や墓地に多いことを説いている。『信州随筆』昭和十一年所収、『定

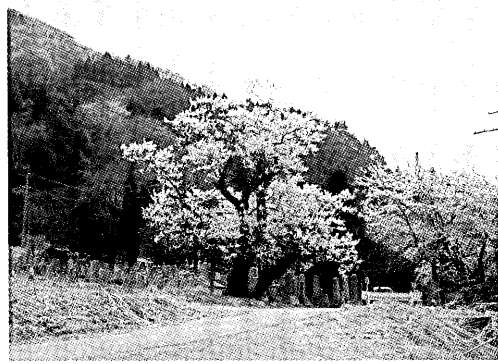
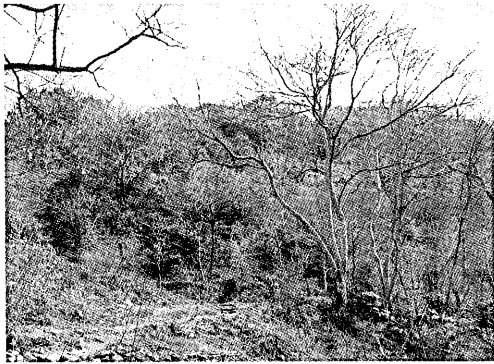
本柳田国男集』第二十二巻。なお参考文献として、「もの与人間の文化史」叢書の有岡利幸『桜Ⅰ』『桜Ⅱ』二〇〇七年がある。桜に関する百科事典的な概説書で、柳田説や花咲翁についても簡略に触れている。また「日本の名随筆」叢書の竹西寛子編『桜』は、柳田「信濃桜の話」他を収録する文芸アンソロジーである。

- 3) 『桜男行状』新訂増補版付載の年譜による（一九九一年、双流社刊）。水上が読んだのは昭和三十三年の平凡社版。双流社版はその後の文章や写真を追録し、水上の序「笹部新太郎翁のこと」と年譜等を付す。笹部は三十八年に小林秀雄の訪問を受け、四十一年に水上の取材を受けた。白洲正子にも「桜男訪問記」がある（『太陽』四十三年四月号〔年譜に四十五年とあるのは誤り〕。注7）の水上の紀行文も載る桜特集号）。笹部は五十三年（一九七八）没、九十一歳。なお神戸市の邸宅跡は岡本南公園となり、氏薈集の桜コレクションは西宮市の白鹿記念酒造博物館に寄託展示されている。
- 4) 同じく笹部の周囲からも「事実」と相違する記述に不満の声があったらしいが、それに対しては笹部は「小説は伝記とは別や」と明言している。笹部と水上の対談「天然のウマさ」、季刊誌「甘辛春秋」1968年冬の巻所載、昭和四十三年十一月。
- 5) と言うのは、高碕の記すところは少々違って、高碕がまず笹部に手紙を出したところ、「彼は、すぐに飛んできた」、現地を下見して二本目の桜を発見し、「身命を賭しても無事に移植してみせる、といい切った」、とあるからである（「文藝

春秋」三十七年八月号所載「湖底の桜」、のち『高碕達之助集・下』に収める）。事実がどうだったかはわからないが、こと桜に関しては笹部に引くに引けない意地があったことは確かである。なお補足すれば、御母衣ダムの建設反対運動（絶対反対期成同盟死守会）は三十四年十一月に終結したが、前総裁の高碕はこの時初めて老桜を見、それが湖底にさみしく揺らぐ姿を想像して「救いたい」と思ったという。注7）の水上の「忘れられた巨桜」に、移植の費用は高碕の私財と有志の金でまかなったとある。なお電源開発株式会社史『電発30年史』（昭和五十九年）にも関係の記事がある。

- 6) 全集本に「ここで、弥吉は、見なれたはずの大桜にしばし目をうばわれた。清水の共同墓地に三百年生きた巨桜であった」とある。単行本には「ここで、弥吉は、いつか竹部からきいた、奇妙な大桜をみてびっくりした。村の共同墓地にある三百年は生きたであろう巨桜であった」とあったのを、以前から弥吉が大事に守りしてきた、というふうに作者が改訂したのである。
- 7) 紀行文「忘れられた巨桜」、『太陽』四十三年四月号〔小説連載開始の半年前である〕。のち『失われゆくものの記』に収める。
- 8) 紀行文「湖北巡礼」、雑誌「旅」三十九年一月号。のち『負籠の細道』に収める。

（二〇〇八年一月三十日）



写真左、宝塚市武田尾の桜山。 右、滋賀県高島市海津の老桜。2008年4月8日撮影。